

Kさんと娘さん

2022. 12. 8

この前、Kさんとその娘さんが、校長室に来てくれた。娘さんは、高校1年生、本校の卒業生である。Kさんはお母さんである。娘さんが、東北大会に行ってきたとのことで、お土産をいただいた。高校1年生が、自分が卒業した中学校の校長先生にお土産を買ってきてくれたのである。ありがたい。

校長室で、いろいろな話をした。自然な流れで娘さんの勉強や大学進学の話になる。いわゆる進学校に進むと、1年生のうちから文系か理系かを決めなければならない。これが厳しい。やりたいことが特に決まっていない場合や将来の目標が定まっていない場合は、どうしたらよいかと困ってしまう。私自身がそうであったし、私の娘もそうだった。Kさんの娘さんもそうである。

それでも決めなくてはいけないため、国語や社会、英語が好きか得意であれば文系、数学や理科であれば理系となりがちである。Kさんの娘さんは理系にしたそうである。私は「それはよい」と賛成の意を示した。可能であれば、理系がよい。きっと専門的に学んだことを生かすことができる。

参考にはならないかもしれないが、ある程度、目標が定まった状態で理系を選択した我が家の息子と目標が定まっていなかった状態で文系を選択した我が家の娘の話をした。結論は、どちらも何とかなっているということである。大学に進み、知識が増え、視野が広がり、様々な人と交流していくうちに、自分の目指す方向が見えてくるのであろう。それでよい。

理想的なのは、大学に進む段階で、将来は〇〇になると決めていることかもしれない。だが、誰でもがそうできるわけではない。思い悩みながら、少しずつ前に進んでいくのが現実である。Kさんの娘さんもそうであろう。

文系か理系かという現在のシステムも近い将来、変わっていくことであろう。しかし、今のところは、現在の制度に合わせるしかない。大学進学への受験勉強は、“自分探し”のようなものである。自分にどんなことが向いているのか、自分はどんなことをしたいのか、自問自答しながら勉強を続けていくようになる。苦しい道だが、意義のある道程である。

Kさんの娘さんは、中学3年生のときに、私立高校を併願せずに、県立高校を受験する道を選択した。中学3年生にとっては、最も過酷な道である。自ら退路を断ったわけである。受験が迫った1月から3月上旬の彼女の姿は今でも覚えている。鬼気迫るとまでは言わないが、他を寄せ付けないオーラを放っていた。彼女は何と戦っていたのか。希望校の定員と戦っていたのではない。自分自身と戦っていたのである。それを見守るKさんは、どんな心持ちだったのだろうか。想像に難くない。

すでに高いハードルを一度突破している彼女である。大学受験も自らの力で乗り越えていくだろう。そう期待している。